

エジプト駐在武官

日誌(13)

カイロPKO（平和維持活動）センターへの招聘

榊枝 宗男 陸自75

防衛駐在官の任務を終了して帰国後15年が過ぎ、小平学校長に就いた時のこと、外務省から連絡を受けアフリカ紛争解決・平和維持活動カイロ地域センターに2週間の教育訓練コースへ上級講師として招聘されることになった。アフリカ連合（AU）のPKO研修の教官として図上演習を行う。

カンボジアから始まった日本のPKOは、自衛隊の幹部が海外のPKO訓練センターで学んでいたが、ようやく初心者マークを外すことが許され、今度は教官を派遣する立場になった。

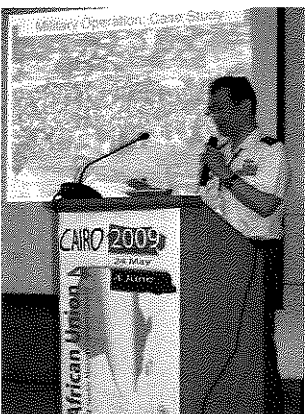
約2週間、エジプトの首都カイロでアフリカ連合の准将・大佐クラスの幹

部向けPKO研修であった。その教官としてわが国から元国連東チモール特別代表だった長谷川祐弘氏と共に参加した。AUは紛争の早期解決に向け、待機軍制度創設を目指しており、研修生の多くは部隊創設や運営などの重責を担う。ポツワナからの参加者が「アフリカのことではアフリカで解決しなければならぬ」と力強く語ったことが今でも忘れられない。

私自身も1994年ルワンダ難民救援活動へ参加し、自衛隊は医療、防疫、給水などを担当した。難民キャンプはトイレ不足で衛生状態が極めて悪く、疫病の発生を危惧された状況を改善したり、1日1500トン超の水を浄水して配給した。これら、避難民の目線で活動することの大切さを強調し、その結果として、約80日間の活動を「銃を一発も撃つことなく、負傷者を1人も出すことなく」任務を終了できた旨、強調して教育を実施した。

滞在中、副官役を務めて下さった嶋本学防衛駐在官から貴重なご意見を頂き、国連PKO活動の過半数が集中する中東・アフリカにおいて、アフリカの目線に合わせた支援を継続することが肝要との確信を得た。

16年振りのエジプトは「ナイルの水を飲んだ者はナイルに戻る」との諺を噛みしめることができたと言えよう。



図上演習講義担当中の筆者